

第61次南極地域観測隊 調査レポート

本学環境学部の徳田悠希講師が第61次南極地域観測隊に参加しました。
徳田講師に南極での生活や調査の様子について話を聞きました。

環境学部
徳田 悠希 講師

プロフィール

【専門】地質学 古生物学
大阪市立大学理学部地球学科を卒業後、同大学大学院に進学し、理学博士を取得。鳥取県立博物館学芸員、主任学芸員を経て、2016年より公立鳥取環境大学環境学部講師に就任。



南極地域観測事業は、1955年の閣議決定にもとづき、国の事業として実施されています。1957年に第1次南極地域観測隊が昭和基地を開設して以来、現在に至るまで60年以上に渡り、南極観測が続けられています。

Q1

南極地域観測隊に参加することになった経緯を教えてください。

私はサンゴの研究者です。サンゴの研究者がなぜ南極と思われるかもしれませんが、南極にはたくさんのサンゴが暮らしています。私はそのような冷たい海や深海に生きるサンゴが専門ですので、研究を始めた時から南極でサンゴ研究するのが夢でした。私が参加した第61次南極地域観測隊では、南極の深海や沿岸の堆積物やそこに含まれる化石を使って、過去の南極の海洋環境を明らかにする計画となりました。日本近海で同様の手法を用いて研究していますので、幸運なことに共同研究者に声をかけていただき、この観測隊に参加させていただきました。

Q2

先生の南極での調査目的は何ですか。

海底の堆積物を採取すると、現在海底の表面に暮らす海洋生物とそれらが死んだあとに残った化石の両方を採取することができます。昭和基地のある東南極地域では、深い海の底にどのような生物がいるのかほとんど分かっていません。そこで、それらの試料を使って、どのような生物がそこに暮らしているのか、それらの化石を使って過去から現在までの南極の海洋環境の変化を明らかにしたいと考えています。



Q3

南極調査の期間とスケジュールを教えてください。また、日本からどのような経路で南極へ行ったのですか。



調査は11月27日から3月23日までの約4か月間です。南半球では夏の期間です。南極には氷の海を移動できる砕氷船しらせで行きました。しらせは東京の晴海埠頭を出発し、オーストラリアの西部にあるフリーマントルという港町に移動します。観測隊員は飛行機で成田空港からオーストラリアに移動し、フリーマントルからしらせに乗船しました。12月2日にしらせはフリーマントルを出発し、南下して南極大陸を目指しました。南極大陸に近づいてからは、進路を西に取り、昭和基地を目指します。海洋観測を行いながら、1月5日に昭和基地の近くに到着しました。私は、昭和基地には入らず、ヘリで昭和基地の南にあるラングホブデという場所に移動し、沿岸と湖沼の調査を開始しました。3週間のキャンプ生活を終えしらせに戻り、1月29日

に昭和基地を離れました。海洋調査をしながら3月19日にシドニーに到着し、シドニーから飛行機で日本に帰国しました。

Q4

観測隊の人数構成を教えてください。また、他にはどんな目的で調査に参加している人がいましたか。

第61次南極地域観測隊は、越冬隊29名、夏隊42名、越冬隊同行者1名、夏隊同行者16名の総勢88名で編成されています。観測隊は私のように南極の夏の期間だけ南極に滞在し、観測を行う夏隊と昭和基地で越冬を行う越冬隊の大きく2つの隊員が含まれます。観測隊は南極での観測を行う隊員だけでなく、昭和基地を維持管理したり、新たな建物を建てたりするため、建築や土木関係の方、電気工事の専門家、雪上車の修理やメンテナンスのための車会社の方、発電機の専門家など多くの技術者も参加していました。さらに南極では無線などの通信が非常に大事になるので、無線の専門家もいます。観測系では、大学や研究所の研究者と学生はもちろん、気象観測のため気象庁の職員や、重力観測や地図作成のため国土地理院の職員、海図作成や昭和基地周辺の潮位の観測のため海上保安庁の職員などさまざまな専門家が参加してい



ました。また、観測隊に同行する、同行者という立場で、昭和基地から日本に向けて授業を行う高校教員や、南極で取材をする通信社・新聞社の記者も一緒に南極に行きました。

Q5

南極での生活はどのようなものでしたか。

しらせでは、海上自衛隊の給養員の方々が調理をしてくれて、全てのごはんをつくってくれます。ごはんは自分で食器に盛るビュッフェ形式でした。しらせの食事は、非常においしく、バリエーションも豊かで、煮物、ラーメン、刺身と和洋中なんでも食べられました。毎月、9日や19日など9のつく日はステーキが出るので非常に楽しみでした。たまにはジャンクフードも食べたかったです。しらせ特製ハンバーガーも出てうれしかったです。しらせの食事で一番印象的だったのが、毎週金曜日のカレーです。海上自衛隊伝統の自衛隊カレーで、毎週違うカレーが出てきて本当においしかったです。辛さも激辛カレーが別盛りで用意されていて、お好みで辛さを調整することができました。それよりびっくりしたのは、観測隊員の中に激辛好きの人が結構たくさんいて、自家製ハバネロソースをカレーにトッピングして食べる至高の辛いもの好き隊員がいたことですね。

3週間のキャンプ生活では、私が調理担当で、いろいろな料理を他の隊員に手伝ってもらいながら、作っていました。食材はしらせから分けてもらい、それをキャンプにもっていきます。しらせの食材は量・質とも最高で、肉から魚介類、野菜、レトルト食品、缶詰、お菓子などありとあらゆるものを提供いただきました。3週間分でも小段ボール100箱分になりました。普段、家で食べられる料理はほぼ全てできるレベルです。米、肉、野菜、魚となんでもありました。食材は様々な種類の肉に、お刺身もたくさんありました。カツオのたたき、イカ刺しに、イクラに、しめさばに…。思い出ただけでよだれが出てきます。食材には生野菜もあります。玉ねぎやジャガイモは当たり前で、キャベツももらえました。キャベツは切り口に石灰が塗られた長期保存用でキャンプでは最後まで野菜をおいしく食べることができました。こんなにたくさんの食材ですが、南極の夏の気温は0度前後なのでテントの外は天然冷蔵庫です。テントの外においておけば腐らず、ビールも冷え



冷えです。料理は、焼き肉に各種鍋料理、麻婆豆腐、生姜焼き、パスタ、カレーいろんなものを作りました。ご飯は圧力釜で炊いていたので、めっちゃうまでした。行く前は心配していましたが、キャンプ生活で食事に困ることがなく、本当に安心して過ごすことができました。幸せな日々でした。厳しいキャンプ生活で激やせすることを想定していたのですが、普段の生活よりも、毎日いいものをたくさん食べることができ、だいぶ太ってしまいました。キャンプ生活でごはんを食べられないかもしれないと、しらせで食いだめしたのも仇となりました。

Q6

南極での必需品は何ですか。

しらせではインターネット以外はすべてのものがそろっているので、ほとんど日本での生活と変わらなかったですね。しいて言うなら、限られた空間で長い時間同じメンバーで顔を合わせるので、コミュニケーション能力が重要です。



Q7

大変だったことは何ですか。

毎日楽しく過ごし、大変だったことはほとんどないですね。しいて言うなら、テント生活で、お風呂に入れなかったことですかね。髪が長かったので、限界になると、海で頭を水で洗っていました。周囲は海氷だらけの0度の海水ですが…。後は、ネット環境がまったくなかったことで、世界で起こっていることが分からなかったことですね。最初は心配でしたが、慣れたらネットサーフィンしなくても平気になりました。普段、どれだけネットに依存しているかを認識しました。人間はネットがなくても生きていきます。

Q8

楽しかったことは何ですか。

やることなすこと、すべてが楽しかったですね。しらせの暮らしも、南極大陸でのキャンプ



生活も全てが楽しかったです。多くの方の協力で調査もうまくいき、海底から多くの堆積物をサンプリングできたこともよかったですね。

Q9

南極調査中一番心に残ったことは何ですか。

南極大陸でキャンプをしていた時、周囲がほんとに静かだったのが印象的でした。音がするのは海の氷が壊れる音と、ペンギンの鳴き声くらいです。静寂とはこのことですね。それと同時に南極という孤独と達成感を感じました。あと、南極大陸には大きな樹などの植物は生えることができないので、雪が解けた南極の地表は荒涼とした岩と砂が広がる、まるで火星のようでした。すぐにSF映画の撮影ができそうでした。観測隊に参加していた火星の研究者も同じように言っていたので、あながち間違っていないようです。帰りのしらせで生まれてはじめてオーロラを見たのもうれしかったです。

Q10

南極に行ったからこそ、学生に伝えたいことはありますか。

我々は地球環境のことを、ほんの少ししか知りません。本で読んだ南極と、実際に行ってみた南極は全く違ったものでした。南極で過ごした日々は私の地球環境の見方を大きく変える経験になりました。世界は広いのです。だから、この世界は知らないことがあふれています。皆さんも身近なところから、環境に関する意識をもって、世界を考えるきっかけをつかんでくれればうれしいです。そして、皆さんもぜひ南極に行ってください。南極の研究と一緒にしてみませんか？

